

恋するようにボランティアを（あとがきから）

「挑戦・男の子育て」の中に、「志の縁結び係」という妙な文字があって当惑された方がおられるかもしれません。正式には、福祉と医療・現場と政策をつなぐ「えにし」ネット・志の縁結び&小間使い、という長い長い私の「肩書」です。

2001年、朝日新聞を卒業することになったとき、おおぜいの方が、冷やし半分、励まし半分で集まってくださいました。その準備のための集まりで奇妙な現象に気づきました。

分野が少し違うと言葉が通じないのです。

医療分野の発起人は怪訝そうに言いました。

「シエンピって、フランス語ですか？」

福祉分野の発起人も尋ねました「イービーエムって、ABMって武器の仲間みたいですが。。。」

シエンピは「支援費」、イービーエムはエビデンスに基づいた医療「EBM」。一般紙には登場しなかった時代とはいえ、医療と福祉で言葉が通じないのは一大事です。

社説を書いていた17年間、科学部時代の17年間、助けてくださった方々と私の間には、深い信頼や強い絆があるのに、医療と福祉どころか、障害の種類が違っていると交流がないらしいのです。

そこで、「励ます会」を「新たなえにしを結ぶ会」に模様替えしていただくことになりました。みなさんワクワクしてくださって、毎年の行事になりました。

経済産業省の後藤芳一さんが書いてくださったコラムによると、私はそのとき、こう言ったのだそうです。「だそうです」というのもおかしいのですが、私自身の記憶は、あいまいなのです。

「実践する人(現場)、制度や予算を動かす人(役所)、理論で裏付ける人(研究)、そして、ジャーナリストが出会うと変わる。やろうという人がいても、一人だと変わらない。つながらないとダメなの、経験的に。」

この本を最後まで読んでくださった方々は、分野の違った方々の挑戦の精神がつながって、社会を確実に変えつつあることに気がつかれたことでしょう。

このとき、言い忘れていた人びとがいます。政治家です。でも本書をお読みになった方々は、挑戦の精神に富んだ政治家の姿を発見なさったことでしょう。



お役所はどうでしょうか？

役所というと「お役所仕事」が思い浮かびます。その役所言葉の辞書を、現役
の厚生省官僚が書いて大騒動になったことがあります。いまは亡き、宮本政於さ
んのこんな辞書です。

・前向きに：遠い将来にはなんとかなるかもしれないという、明るい希望を相
手にもたせる言い方

・検討します：検討するだけで、実際にはなにもしないこと

・配慮します：机の上に積んでおくこと

・お聞きしておきます：聞くだけでなにもしないこと

・努める：結果的に責任をとらないこと

・見守る：人にやらせて自分は何もしないこと

・鋭意：明るい見通しはないが、自分の努力だけは印象づけておきたいときに
使う言葉

・慎重に：断りきれないときに使う。実際には何も行われないこと

でも、本書を読み終えたみなさんは、この辞書とまるで違う、挑戦する行政官
の姿を発見なさったことでしょうか。そのような人びとを「カリスマ職員」と名づ
けたのは、元厚生労働省、いまは大阪大学大学院教授の堤修三さんです。

介護保険制度の創世記に大量発生したカリスマ職員のことは、『物語・介護保
険』に譲ることにして、そこに登場しない方をご紹介します。滋賀県庁の渡邊光
春さん。どんな課に配属されても現場とつながり、挑戦精神を発揮しています。
課にこんな張り紙がしてありました。

真剣だと、知恵が出る

中途半端だと、愚痴が出る？

いい加減だと、言い訳が出る

そういえば、ノーマライゼーション思想の父バンクミケルセンさんもグリュー
ネバルトさんも、挑戦精神に富んだ官僚でした。

話を2001年に戻します。この年から私は、大阪大学大学院で「ボランティ
ア人間科学」という、日本でただひとつ、ボランティアの名をつけた講座を受け
持つことになりました。

大阪の人にボランティアってどう思いますか？と尋ねると、たいてい、こんな
答えがかえってきます。

「そんな、ええかっこしいみたいなもの、すきやおまへんなあ」

ところが、大阪人は、ボランティアとは気づかずにボランティア精神を発揮し
ています。まちを歩くと、どこよりバリアフリーです。牧ローニさん、尾上浩二
さんたちの「だれでも乗れる地下鉄を」「そよ風のように街へ出よう」という世

直しボランティアのおかげです。

大阪大学を退官するとき、関西弁を喋れる方だけによるシンポジウムを催していただきました。そこでまとまった「関西流」は――。

「ええことは、オカミにお伺いを立てずに、まず、やってみよやないか、というノリ」

「とめたりせえへんのが関西人。無責任に、ヤレヤレ、とあおる」

「あほといわれたい、そんなところがある」

「好奇心旺盛」

「問題をかかえた当事者が、いつのまにか逆転して支援者になってる」

「当事者と研究者が仲よう、つながってる」

「物差しはひとりひとり全部ちごてオーケー、という開き直り」

「阪神淡路大震災の経験がバネになったみたいや」

「嫌々やってもおもしろないので、楽しみながら面白うやる」

第一章に登場したクローさんが、あの奇想天外な制度を社会に認めさせてしまった秘訣、「世直し七原則」と奇しくも一致します。

- ・グチや泣き言では世の中は変えられない
- ・従来の発想を創造的にひっくり返す
- ・説得力あるデータにもとづいた提言を
- ・市町村の競争心をあおる
- ・メディア、行政、政治家に仲間をつくる
- ・名をすてて実をとる
- ・提言はユーモアにつつんで

「ほっとかれへん」がボランティアの本質と教えてくださった大阪ボランティア協会の早瀬昇さんは、「ボランティアは恋に似ている」ともいいます。

☆するしないを決めるのは自分

☆自分自身の「思い」がエネルギー

☆対象を選べるし、選ばないと始まらない

☆しばしば、偶然の出会いから始まる

☆しんどいこともあるが、元気にもなる

☆想像力がないと、自分だけ満足して相手を不幸にする

☆正義よりは、愛情

☆やめるとき、別れるときは辛く、悲しい

本の続きは「えにし」を結ぶホームページ、<http://www.yuki-enishi.com/> をどうぞ。